

開業百周年記念事業に係る資料



鉄道延びて

羽越線4駅100年

本県と秋田県を結ぶ幹線鉄道、羽越線の駅のうち、胎内市の平木田、村上市の坂町、岩船町、村上の4駅が11月1日、開業100年を迎える。交通手段を船や人力車、馬車に頼っていた東北地域にとって、羽越線の早期延伸は悲願だった。鉄道の訪れは新たな町並みをつくり、人の流れを変えていった。誕生から1世紀がたつそれぞれの駅の思い出を、地域の人々と振り返る。

平木田駅は大正から昭和にかけて、今昔物語にも登場する古刹「乙宝寺」(胎内市乙)へ参拝する乗降客でにぎわった。駅前通りや寺周辺には参拝客を迎え入れる旅館が立ち並び、桜の木が植えられた駅舎前には、人力車が客待ちをしたという。

平木田 (胎内)

< 1 >

書店など数多くの商店が集まった。

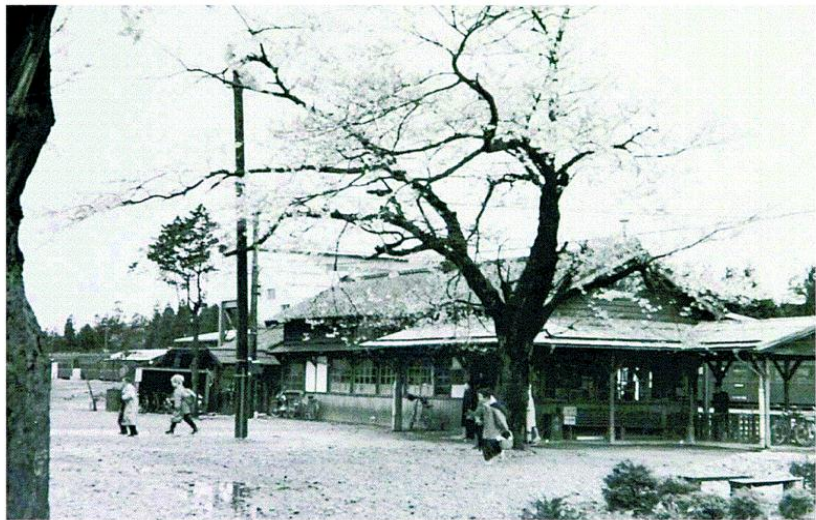
国指定重要文化財の三重塔がある乙宝寺は、駅から海側に向かって約4分の場所にある。寺が所蔵する金剛界大日如来像は、開通間もないころ、汽車を使って運ばれた。小川義隆住職(80)は「大日様をこの寺に運ぶ際は、駅から行列ができていたそうです」と語る。

「新発田の旧制中学に通うために、駅まで45分かけて足駄で歩いたよ」。乙宝寺近くにある和光院の安沢宣之さん(82)は懐かしそうに振り返る。当時は駅から乙宝寺までは砂利道で、参拝客や地域住

乙宝寺参りでいきわい

民のほとんどが歩いた。1998年には、平木田駅前自治会が駅の歴史をまとめた冊子を作った。住民らの記憶や郷土誌、新聞記事などを

基に、当時の写真を添えて紹介している。現在の自治会長を務める中野忠さん(69)は「駅前の歴史に詳しい諸先輩方が亡くなると語った。作られたことが、冊子を作ったきっかけだった。この一帯は駅とともに発展し、みんなに愛された駅でした」と語る。



1983年まで使用された旧駅舎。大きな桜の木が植えられていた。昭和40年代ごろの撮影とみられる

鉄道延びて

羽越線4駅100年

< 2 >

坂町駅は米坂線と羽越線の接続駅で、かつては山形県の大工場などへの輸送物資やコメが集まる貨物基地だった。戦後の最盛期、駅構内の職員は約600人おり、駅前には映画館や飲食店などで活気づいていた。

「昔の坂町駅は売店があり、駅弁売りの声でにぎやかだった」。東日本鉄道OB会で坂町支部会長の富樫宇栄一さん(72)は懐かしむ。1962年から20年以上、坂町駅機関区で機関車の運転や検査などを務めた。「駅構内は、秋田や山形方面から数十両もつながつてくる貨車を行き先ごとに組み替える作業で終日大忙しだった」と振り返る。

当時、坂町駅から羽越線を横切り金屋(村上市)方面に向かう途中に踏切があったが、あまりに多くの列車が行き交うため「開かずの踏切」と呼ばれた。住民の要望により、70年に陸橋ができた。駅前には大勢の職員を保養

坂町(村上)

するための診療所や、映画館、パチンコ店などの娯楽施設が並び、駅を中心に町が形成された。富樫さんは「仕事を終えた3交代勤務の同僚が、飲食店やパチンコ店にいるのをよく見掛けたよ」と笑う。自動車普及し、貨物列車での輸送が少なくなるにつれ、駅の活気が失われた。駅前の診療所や映画館も無くなり、現在の駅員数は5人になった。



かつての坂町駅前の通り。旅館や飲食店などでにぎわっていた

戦後支えた貨物の町

開業記念日の11月1日は、記念列車が駅に停車するのに合わせ、横断幕などで迎える。2日は駅舎をイルミネーションで飾る予定だ。南さんは「昔の様子を知らない人にも、かつての駅のにぎやかな雰囲気が伝わればうれしい」と目を細めた。

鉄道延びて

羽越線4駅100年

< 3 >

1967年8月28日、県北部は豪雨に見舞われ、荒川の堤防が決壊。羽越水害が襲った。地盤の低い岩船町駅は、駅舎の大部分が水没するなど甚大な被害を受けた。

駅は、旧岩船町と旧西神納村が鉄道誘致に取り組んだ努力が実を結び誕生した。今は無人駅だが、かつては村上駅をしのぐ量の貨物を取り扱っていた。55年、神納、西神納、平林の3村が合併して旧神林村が発足。駅近くに村役場ができ、にぎわいを増した。

岩船駅前の山崎与次さん(83)は、61年ごろ旧神林村役場の職員として移住してきた。当時の様子を「荷物を積んだ牛車や馬車が駅前の道路にあふれかえっていた」と振り返る。駅前には神納平野で取れたコメを蓄える倉庫や農協、運送業などがあつた。

羽越水害では、人通りの多い駅前に濁流が押し寄せた。山崎さんは同僚と共に役場にある消防車を運転し、駅の水

岩船町(村上)

ムまで上げた。水はホームの高さ近くまで迫っていた。

「牛や馬、酒だるが流れて地獄のようだった。消防団も多く流され、対策に追われた」。駅舎の半分以上は水没し、山崎さんは川船で移動して食糧を避難先の役場などに届けた。翌日夕方にやっと水が引いた。

水害の教訓から西神納地区の住民は2000年、盛り土式で通す計画だった日本海東北自動車道の一部区域を高架構にするよう、日本道路公団に要望した。高架橋は盛り土式に比べ道路下の水のはけ口

羽越水害で駅舎水没

が多く、洪水時に低地の岩船町駅前などに水がたまらないようにするためだった。11年に神林高架橋が完成した。11月1日の開業記念日に

は、羽越水害時の駅前の様子などを集めた写真が展示される。住民らの寄付で作った開業100周年記念碑も除幕す

大嶋芳美さん(68)は「水害の記憶も含め、昔の駅の思い出をあらためて振り返るきっかけにしたい」と話している。



羽越水害で大部分が水没した岩船町駅=1967年8月29日

鉄路延びて

羽越線4駅100年

< 4 >

茶畑が広がる地で開業した村上駅。1世紀の歴史の中で、周辺の町並みは移り変わった。駅に専用線を持つ工場や精錬所があった時代、大型の商業施設が建った時代。現在は観光地・村上の玄関口として重要な位置を占めている。

「小さいころ駅舎は汽車を待つ人たちでいっぱいだった」。村上駅前で旅館を営む石田勝雄さん(71)は懐かしむ。駅前には車を降りる人を待つバスがずらりと並んだ。ただ、汽車の発着時間以外ががらんとした広場になった。子どもたちには格好の遊び場。石田さんは「駅舎の前でよく野球をやったものだ」と話す。

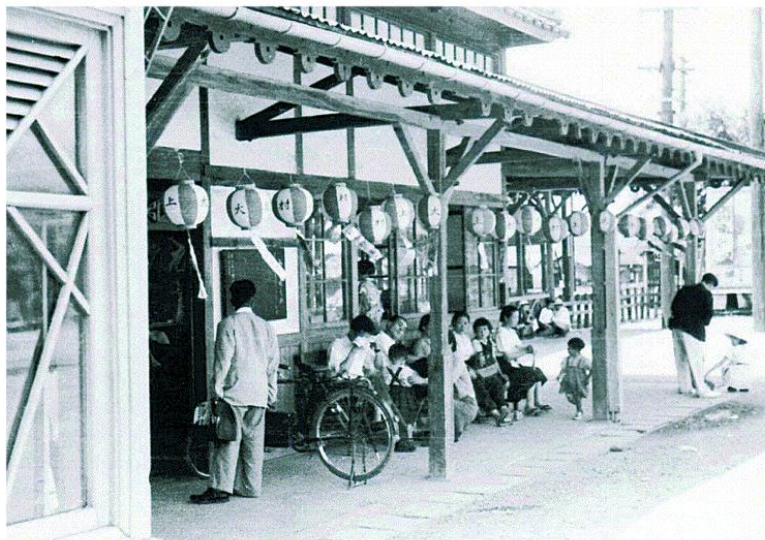
村上

駅前には桜が咲き、花見ができた。駅前で酒店を経営する平間由貴子さん(67)は「あの頃は優雅でいい時代だった」と目を細める。

やがて大型の商業施設がやって来る。1973年にジャスコ村上店が精錬所跡地にオープン。77年には地元商業者が村上ショッピングプラザを開店した。同じ年には県村上地域振興局も移転するなど駅前の雰囲気は変化する。しかし、93年にジャスコと村上プラザが村上市仲間町の国道7号沿いに移り、再び駅前には姿を変えた。

茶畑越し観光の玄関

2000年、01年には「町屋の人形さま巡り」「町屋の屏風まつり」が相次いで始まり、城下町の資産を生かしたイベントが定着。瀬波温泉もあり、村上駅は観光客を出迎える。見送る大切な場所となっている。05年には外観をレトロ口風に改修した。市観光協会の役員でもある山貝さんは「常に駅は村上の顔。村上をアピールする存在で居続けてほしい」と期待している。



汽車を待つ人らが写る1963年ごろの村上駅の1コマ

(おわり)

第四節 鉄道の開通

岩船町駅の 設置

日本にはじめて鉄道が新橋―横浜の間に開通したのは明治五年であった。それから四十二年を経て大正三年十一月、漸く新津―村上間に鉄道が開通した。それまでは急ぎの旅は、塩谷湊から対岸の海老江湊か桃崎湊へ渡り、陸路を行くか、または新潟―酒田間を就航していた渡津丸に乗船して、目的地へ行くより方法がなかった。貨物は、廻船問屋を通して、新潟―北海道へ船で積み出したり、荷物の受け入れを行っていた。

こうした時代に、安全さとスピードの点で、海運をはるかに上回る鉄道がかかるというニュースは、大正の始めごろからあり、利に聡い塩谷・岩船の商人の間には、この大きな時の流れにどう対抗するか、あるいはこれまでたよって来た海運をどう切り換えて行くか、重大な岐路に立たされることになった。

このため、一般の間には「鉄道は海岸線を通り、岩船を通る予定であったのが、岩船の人が、海運の衰微するのを恐れて、鉄道敷設に反対したため、現在の路線を通るようになった」と言い伝えられているが、これは事実と反対で、岩船の人はむしろ鉄道の通ることを望んでいて、積極的に路線の通る運動を展開していた。

しかし、地盤調査の結果、八日市区域は鉄道を通す地盤に適さないということがわかり、現在の小口川地域に路線が決定することになった。これを知った岩船の人は、それではせめて駅名にだけでも「岩船」の名を残し、全国へ岩船町の名を売り込み、商業発展に役立てようという考えから、西神納村へ働きかけ、西神納村は実益を

第四節 鉄道の開通



岩 船 駅

とり、岩船は名をとることに話し合いが出来たため、すでに駅名が「小口川駅」に決定していたものを、大正三年四月に、岩船町長須藤敬吉郎・西神納村長磯部忠太郎両氏が上京し、時の鉄道院総裁後藤新平に陳情して「岩船町駅」になった。

鉄道開通の日、これを喜んだ岩船の人達は、盛大な祝賀行事を行って、鉄道開通を喜んだ。

その料金は、貨物収入を含め二五三円六〇銭であった。開通前の十月には百武卯助、渡辺文郎、益田甚次郎などにより、出資金一万円で運輸倉庫会社が駅前^に設立され、営業が開始された。翌年九月、駅内には村上特産陳列設置が認可され、漆器、鮭児^{ひな}孵化^か標本、製茶、山辺里織、陶磁器などを陳列した。地場産業の紹介にも力を入れた。

引き続き、秋田に向かっていたの鉄道工事が進められた。駅前には、工事関係者の宿泊所や食堂が建ち、郵便局や物産店も追々でき、駅前通りとしての姿を整えてきた。

工事の施工主大倉組の監督であった浅見詢二は、大倉組が引き揚げた後に独立して、土建業を営み、土木工事や発電所工事に手腕を示した。さらに村上町議として町政に参与、産業発展にも尽力した。鉄道とかかわりの深い人であった。田端町の町づくりに尽くした人々も、大半は他地域より移ってきた人たちで、開拓者精神に燃えていた。

村上線開通後、上海府、下海府を経て、鼠ヶ関までの羽越線工事は大変な難工事であった。三面川の鉄橋架設では、鮭の遡上を妨げないようにと鉄道省に交渉し、本流に橋脚が立たない

岩船町駅の由来

大正三年（一九一四）、穀倉地帯の神納平野を村上線が貫通し、停車場と呼ばれた駅を、鉄道省では岩船町に隣接する八日市に設置する予定であった。一部廻船問屋や八日市の田地所有者は、海運の衰えや農地の減少を恐れ、反対を唱えた者もいたが、大きな声にはならなかった。

そうするうち、用地の調査がはじまると、八日市が軟弱地盤で設立不可能と判断された。ところが、岩船町当局や重立は、産業や町の発展には駅の設置が必要であると考えた。そこで、鉄道総裁後藤新平^に来町を願い、岩船町近くに設置することを請願したところ、西神納村の小口川地区に決定した。

つぎに問題になったのは駅名である。

1 節 羽越線の開通と水力発電

よう、九二坪の長大スパンを採用した。この特殊構造は、フランス技師によるもので名物の鉄橋となった。

九か年も費やし、十三年七月、ようやく竣工、これをもって羽越線は全線開通した。一日に上り下りとも七本の列車と貨車が運行し、青森―神戸間の連絡が可能となった。東海道線経由の大阪―青森間に比し、北陸線、羽越線経由は二四〇キロ余り短縮され、時間にして東海道線、東北線經由急行とほぼ同じになり、羽越線の輸送迅速が立証された。

経済交流も急速に高まり、秋田からは木材、石油、酒、工芸品、青森からは木材、リンゴ、山形からは織物、木工品、奥羽地方全体では木炭などが移出された。また、西方からは、富山、金沢の銅・鉄器、和歌山、石川の漆器、京阪の雑貨類などが移入された。もっぱら海運によっていた北海道向けの穀類や酒が鉄道輸送となり、一方、北海道からは肥料、塩魚などのほか、石炭、セメント、鉄材など工業の近代化に必要な資源が多量に流通してきた。米穀も、長野方面に移出が目立つようになった。製糸業が盛んになるにつけ、製糸工場女子従業員の食糧需要が急増し、それに応じての移出であった。

地方産業への期待は大きく、工場誘致もなされ、製糸会社の設立、スキー製作所、農機具工場の拡張など、大きな町工場の設立が目新しく眺められた。駅へ通ずる商店街は活性化をはかり、十二年、安良町通りでは下屋（ひさし）を取り去り道路の拡張をおこなった。

鉄道当局は、その地の町村名を付けるのが一般的であるとして「小口川駅」とすることを主張したが、岩船町側は「岩船町駅」に固執して譲らず、ふたたび後藤新平に嘆願し「岩船町駅」を認めてもらった。こうして同駅は誕生し、以来村上駅をしのぐ貨物の取り扱い量を誇ったのである。

町当局は、駅ができた新しい時代の流れに遅れじと、町民の目が広い世間に向くよう「夏季大学講座」を企画した。大正十年七月の一月間、中央より超一流の講師三三人を招いて、内容の充実をはかった。町費から、一二〇〇円も支出する身の内れようであった。

また、駅と連携して団体旅行の誘致をおこなった。「岩船諸上寺西国三三霊場めぐり」と銘打った観光行事は、それなりの成果がみられた。

大正期は岩船町の繁栄期であった。

羽越本線 新発田～村上間 開通100周年 記念入場券

2014.11.1



白内所の蒸気機関列車(1950年代)

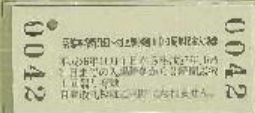
新 加 金 中 平 坂 平 岩 村
発 治 塚 条 木 町 林 船 上
田 治 塚 条 田 町 林 町 上

羽越本線 新発田～村上間開通100周年

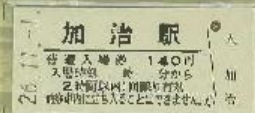
羽越本線の生誕出来事

- 1911.6.1 平上線(新発田～中条)開通。
- 11.1 新上線(新上～村上)開通。
- 1914.7.31 羽越線(新上～新発田)開通。
- 1921.5.14 丁体通(新発田～新上)開通。
- 1923.7.31 山形羽越線(新上～山形)開通。
- 1933.11.16 山形羽越線(山形～新上)開通。
- 1944.5.31 新上線(新上～新発田)開通。
- 1953.5.10 山形羽越線(山形～新上)開通。
- 1960.9.28 山形羽越線(山形～新上)開通。
- 1967.12.1 山形羽越線(山形～新上)開通。
- 1969.6.18 山形羽越線(山形～新上)開通。
- 1972.3.10 山形羽越線(山形～新上)開通。
- 1973.5.20 山形羽越線(山形～新上)開通。
- 1973.12.27 山形羽越線(山形～新上)開通。
- 1974.12.1 山形羽越線(山形～新上)開通。
- 1975.12.1 山形羽越線(山形～新上)開通。
- 1976.12.1 山形羽越線(山形～新上)開通。
- 1977.12.1 山形羽越線(山形～新上)開通。
- 1978.12.1 山形羽越線(山形～新上)開通。
- 2014.11.1 羽越線(新発田～村上)開通100周年記念入場券発売。

新発田駅



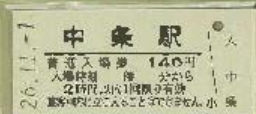
加治駅



金塚駅



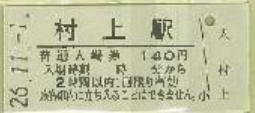
中条駅



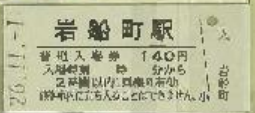
平木田駅



村上駅



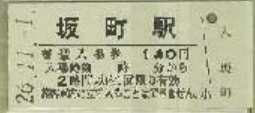
岩船町駅



平林駅



坂町駅



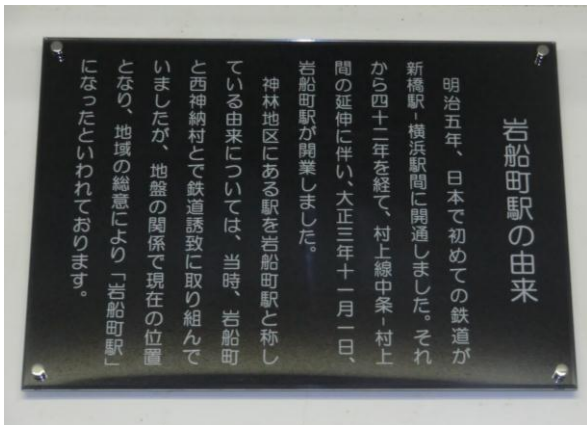
新発田駅 (1911年)

100 Shibata-Murakami
years anniversary

【高さ = 2.3m】



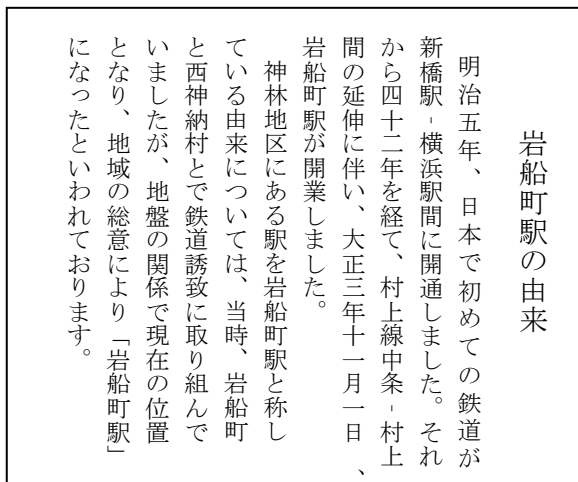
【幅（縁石部） = 3.4m】 【岩船町駅の構内に設置】



【岩船町駅の由来看板】



【岩船町駅の待合室に設置】



【由来看板の内容】



【岩船町駅の乗降風景】

地域の発展と共に歩んだ百年

大正3年11月に営業を開始した岩船町駅が、今年11月1日(土)で開業百周年を迎えることとなりました。明治5年、日本で初めての鉄道が新橋駅・横浜駅間に開通しました。それから42年を経て、村上線・中条・村上間の延伸に伴い、岩船町駅が開業しました。

神林地区にある駅を岩船町駅と称している由来については、当時、岩船町と西神納村とで鉄道誘致に貢献したことから、地盤の関係で現在の位置となり、地域の総意により「岩船町駅」になったといわれています。この節目の年を迎えるにあたり、開業百周年記念事業を催し、先人の方々に敬意を表すると共に、これからの地域の皆様で「岩船町駅」の大切さを思い、利用していただくという趣旨のもと、記念事業を開催しようというものです。

開業百周年

岩船町駅に関連した写真も募集しております。詳しくは、裏面をご覧ください。
(写真は神林村誌から)



岩船町駅開業百周年記念事業開催

と き:平成26年11月1日(土) 午前10時～
と ころ:JR岩船町駅構内
記念事業内容

- ・記念碑建立および式典
- ・記念パネル展

連絡先
〒959-3492 村上市岩船駅前56番地
神林支所地域振興課 TEL 0254-66-6122 FAX 0254-66-6110
Eメールアドレス: k.shinko-chiiki@city.murakami.lg.jp
〒958-0052 村上市八日市9番8号
岩船地域コミュニティセンターいわくす会館
TEL 0254-56-7071 FAX 0254-56-6055

主催:岩船町駅開業百周年記念事業実行委員会
後援:村上市、JR東日本村上駅、新潟日报社、村上市観光協会、岩船地区区長会、神林地区区長会、神林商工会、岩船商工業会、岩船まちづくり協議会、西神納地域まちづくり協議会、かみはやし農業協同組合、新潟漁業協同組合岩船港支所、新潟リハビリテーション大学、村上新聞社、いわふね新聞社

岩船町駅開業百周年記念事業



思い出、なつかしい列車の風景など、「写真」募集
百周年を記念して駅舎、文化祭で展示します。

岩船町駅は平成26年11月1日に開業百周年を迎えます。これを記念して11月1日(土)に岩船町駅で記念事業を開催します。駅・列車・風景など岩船町駅にまつわる写真を募集します!

募集内容
JR羽越本線・岩船町駅(列車・駅舎・プラットフォームなども含む)にまつわる写真を募集しています。今では見ることのできない懐かしい写真などをお待ちしております。

募集期間
平成26年6月2日(月)～平成26年10月10日(金)〆切

提供方法
村上市神林支所 地域振興課 自治振興室 TEL 0254-66-6122 にご連絡ください。

写真の取扱い
募集した作品は、記念事業会場でのパネル展示、文化祭等に使用する予定です。
※写真は複製・データのどちらでも受け付けます。写真は返却いたしません。

連絡先
〒959-3492 村上市岩船駅前 56番地
神林支所地域振興課 TEL 0254-66-6122 FAX 0254-66-6110
Eメールアドレス: k.shinko-chiiki@city.murakami.lg.jp
〒958-0052 村上市八日市9番8号
岩船地域コミュニティセンターいわくす会館
TEL 0254-56-7071 FAX 0254-56-6055

【平成26年6月12日配布 百周年記念事業周知チラシと思い出の写真募集チラシ】

岩船町駅開業百周年記念事業実行委員会

会 長	大嶋 芳美(高御堂)
副会長	磯部 幸雄(岩船下浜町)
監 事	大越 孝行(岩船下大町)
監 事	竹内 友二(新飯田)
実行委員	坂上 孝雄(小口川)
	佐久間 成一(岩船縦新町)
	佐藤 紀代美(下助漕)
	須貝 慎一郎(平林)
	西坂 寛(岩船上町)
	本間 賢五(岩船縦新町)
	増田 豊尚(牧目)
	横山 房夫(下助漕)
	渡辺 誠(岩船駅前)





岩船町駅開業百周年記念誌

平成 27 年 3 月発行

発行 岩船町駅開業百周年記念事業実行委員会
〒959-3492 村上市岩船駅前 56 番地
村上市神林支所地域振興課 TEL 0254-66-6122
〒958-0052 村上市八日市 9 番 8 号
岩船地域コミュニティセンターいわくす会館
TEL 0254-56-7071

印刷 神 林 印 刷
